

# 昭和初期「恋愛論ブーム」における『女人藝術』の位置

太田 知美

## はじめに

『女人藝術』は1928(昭和3)年7月から1932(昭和7)年6月まで刊行された長谷川時雨主宰の女性文芸雑誌である。執筆、表紙絵、編集などを全て女性の手で行った雑誌であり、同人誌ではなく一般誌・商業誌として出版され、創刊から終刊まで定価は40銭と変わらなかった。ちなみに三回発禁処分を受けている。

『女人藝術』の編集部の方針は「女性文筆の『公器』<sup>1</sup>として、女性執筆者たちへの発表の場を与えることであったが、内容は次第に左傾化して行き、様々な思想が介在し、各方面の女性が活躍出来る「公器」としての役割を果たさなくなっていた。

左傾化する前の初期の『女人藝術』において、注目すべき側面の一つとして、恋愛に関する記事が非常に多く見られる点が挙げられよう。1928年7月の創刊号からほぼ毎号、恋愛についての記事、評論、座談会などが掲載され、1929年3月には「特集—自伝的恋愛小説号」が刊行された。

本論では、1928年、1929年の恋愛論の特徴や傾向を探るとともに、この時期に『女人藝術』に集中的に恋愛・結婚・性に関する論文が発表されている時代的背景や、同時代の他雑誌との関連をも考察したい。

## 1. 同時代的背景

『女人藝術』で恋愛が頻繁に取り上げられているのと同時期に、「恋愛論ブーム」と呼ばれるような現象が他の雑誌も含めて起こっている。これについて菅野聡美は次の様に述べている。

「大正恋愛論ブーム終結後、女性たちの恋愛論争が勃発した。これを「第二次恋愛論ブーム」と呼ぶことにしよう。論者の数も広がりも〔厨川〕白村らが巻き起こした恋愛論の一世風靡とは比較にならない局地的なものではあったが、そこには男性知識人の恋愛論にたいする回答というべきものが見られる。」<sup>2</sup>

菅野が述べている「大正恋愛論ブーム」の契機となったのは、厨川白村が1921(大正10)年9月30日から10月29日まで『東京朝日新聞』に連載した

「近代の恋愛観」である。翌年1922(大正11)年『近代の恋愛観』を単行本として出版し、ベストセラーとなった。

菅野によると、女性たちの「第二次」恋愛論争には二つの議論が含まれている。一つは、ソ連の女性革命家コロンタイ(Alexandra Kollontay)の小説『恋愛の道』に見られる恋愛観をめぐるもので、もう一つは山川菊栄に対して高群逸枝が挑んだ論争に若干名が加わったものである

しかし彼女が分析しているのは特に『婦人公論』を中心とした1928年から1929年にかけての山川菊栄と高群逸枝の間の恋愛論争だけであり<sup>3</sup>、コロンタイの小説『恋愛の道』に見られる恋愛観をめぐる論争については特に触れられていない。また、『女人藝術』には全く言及していない。この時期の恋愛論争の全体像を浮かび上がらせるためには、まず『女人藝術』や同時代の他の雑誌に発表されている恋愛に関する記事や論文を、網羅する必要がある。

「資料1」では、1928年から29年前後の恋愛論リストを作成するために、菅野が「第二次恋愛論ブーム」として挙げている論文一覧を参考に、以下の物を補足追加した。

- 1) 『女人藝術』、『文芸戦線』、『婦人運動』(1923.6-1941.8)に発表された恋愛論
  - 2) 『婦人公論』、『婦人戦線』(高群逸枝発行兼編集印刷人1930.3-1931.6)で恋愛や結婚を特集のテーマとしている号
  - 3) 恋愛について頻繁に発表している高群逸枝の著書『恋愛創生』(1926年)
- 本論ではこの「資料1」のリストを基に考察を進める。

## 2. 恋愛、結婚、性、母性についての言説の傾向

### 2.1. 女性の経済的自立と恋愛・結婚の問題

女性の経済的自立の必要性は山川菊栄、平塚らいてう、神近市子<sup>4</sup>らが述べている。山川菊栄は、女性が結婚生活においては経済的に従属している事実を論じ、見合い結婚ではなくて、恋愛結婚であれば良いという考えに疑問を呈している。

「問題は男子が経済的中心であり、女子はただこれに依属することによって生活の資を得ているという、現在の家庭生活の基礎に変化のない限り

[...] 互いの間に経済的従属関係のない、対等の個人同士の間には結ばれるような、純粹単純な恋愛関係が、結婚後まで持続されることの不可能な点にある。」

「婦人が恋愛を売らずに済む時代は、同時に彼女が結婚によらずして生活し得る時代—真面目な労働によってのみ生活し得る時代でなければならぬ。婦人が単に [...] 性によって生活することに何らの不満と屈辱とを感ぜずにいる間は、職業的娼婦たるか否かを問わず、彼女はついに性の奴隷であり、売り物の一つであることに変わりはない。」<sup>5</sup>

平塚らいてうも、知識婦人が「封建的結婚生活をさげ、恋人として」同棲生活を選んだとしても、経済的に独立していない為に「家庭奴隷と社会奴隷といふ二重の重荷を負」っている現実を指摘し、「経済難、生活不安」に苦しむ現在の知識婦人は、「無産婦人大衆と共に同一戦線に立つ必要がある」と述べている<sup>6</sup>。

## 2.2. 山川菊栄と高群逸枝の恋愛論争

山川菊栄が「景品付き特価品としての女」で、経済的従属関係から離れてのみ純粹単純な恋愛関係が成立するとしていることへ、高群逸枝がアナキストの立場から反論したところから、二人の論争が『婦人公論』誌上で始まった。

高群は、「純粹素朴に近い美および恋愛の影」は「分業的、統轄的社会ではなくして、総合的、集約的社会」で、「反マルクス主義的」な「農村という一つの飛び離れた社会組織」にあるとした。また、山川菊栄は経済的従属関係から離れば純粹単純な恋愛関係が成立するとしているが、「経済的依属を承認しない社会組織」は、「マルクス主義の世」では不可能であるとも反論した<sup>7</sup>。

これに対し翌月に山川は「ドグマから出た幽霊」で反論するが、マルクス主義の説明に終始した論文で、最後の一段落でのみ恋愛に付いて言及し、「[...] 純粹な恋愛」ができるのは、未来の貧困もなく階級もない社会のみである」と結んでいる<sup>8</sup>。これに対する高群の反論<sup>9</sup>ではアナキズムの説明が大半を占め、二人の論争は恋愛論争というよりも、マルクス主義とアナキズムの論争といった観を呈した。

## 2.3. コロンタイの恋愛観に対する賛否両論

コロンタイの小説『赤い恋』（松尾四郎訳、世界社）も話題に上るが『恋愛の道』（林房雄訳、世界社）所収の短篇『三代の恋』の登場人物ゲニア（ジュニャ）の態度の是非が特に議論の中心となった。ゲニアは、恋をするには時間がかかるが、自分には仕事で時間がないため、性欲を満たすために愛情抜きで

色々な男と性的関係を結ぶという女性で、母親の愛人とも関係する。

『恋愛の道』の訳者である林房雄は、コロンタイの恋愛観を肯定している<sup>10</sup>。林によると、コロンタイは「恋愛と新道徳」という論文で現在の男女の結合形態を（1）正式な合法的結婚（2）買淫（3）自由恋愛としているが、これらは「現在の「恋愛的飢餓」—「性的危機」の袋小路から人類を導き出すことはできない。しかし「恋愛遊戯」で「エロテックな友人関係」を経験することで、「真の恋愛を享受するところの能力は次第に養はれて行く。」この恋愛観の実現のためには「一個の独立人、活動人としての女性が、現実の社会に大衆的に出現してゐることを必要とする。」林は、このコロンタイの恋愛観を「働く者の恋愛観—プロレタリアートの恋愛観である」として論文を結んでいる。

これに対し、女性論客はコロンタイの恋愛観、特に登場人物ゲニアの恋愛観に対して反対した。高群逸枝は、仕事に忙しくて「恋などしてゐる暇はない」と言った伊藤博文を引き合いに出し、「この書におけるコロンタイの解釈は、このブルジョア政治下流と同意見のもので、新しい恋愛観などいふべきではなからう。」<sup>11</sup>と述べ、また林房雄の論文に反論して、「尊敬すべき異性に対して性的牽引を感じ、性的衝動を惹起するのが、ごく一般的な恋愛上の方則」であるから、恋愛なき性交は「意識的な人為的な生殖器の玩弄であらう。」とし、コロンタイの恋愛観に対し「道徳的な批判」は持たないが、「唯不自然なものを感じる」<sup>12</sup>と感想を述べた。

『女人藝術』には、『恋愛の道』の合評会が朝日新聞社で行われたことの報告が、創刊号に掲載された<sup>13</sup>。また、山川菊栄は「ゲニアの態度に、両性関係における新しい指導的な見地を発見することはできず、飢餓時代における単純な原始的な食欲の方則が、そのまま性的関係の上に適用されてゐるのを見るばかりである」<sup>14</sup>と評した。

## 2.4. 恋愛より革命

恋愛よりも革命、婦人解放事業の方が大事だとする論文が、『女人藝術』や女性運動誌『婦人運動』やプロレタリア文学誌『文芸戦線』などに載った。

平林たい子は「プロレタリア婦人は、あの、齒の浮くやうな自由恋愛主義をとつてはならない。新しい時代に於いては、恋愛は相互の闘志を鼓舞し決意を固くさせるものでなければならぬ。」<sup>15</sup>と主張し、神近市子も「過重な婦人の恋愛感情こそ、よく考えてみると寧ろ不自然な悲劇の発端を待つてゐる...」とした<sup>16</sup>。

『女人藝術』では、コロンタイの恋愛観への反論としてレーニンの恋愛観を紹介し、恋愛が革命に弊害をもたらすことを述べる論文が幾つか掲載された。神近市子はアメリカ人ジャーナリストの見聞録『ソビエトロシアの婦人』の第8章を訳し、「共産主義者の社会では性的衝動と恋愛要求との満足は、一杯の水を飲むやうに簡単で些細なことであるといふ有名な理論」が青年に誤解されたこと、レーニンは禁欲を説きはしないが、彼によれば「無節制な性生活は」人生の喜びや活気を減じ、革命の時にこれは「甚だ悪い」こと、などを紹介した<sup>17</sup>。同様の内容を、菊池小夜子も論じ、レーニンは「性的生活の放肆」や「性的肥大症」は「生活の歓喜」を与えないため「革命の時期に於ては、それは害悪まったく害悪である」としている、と紹介した上で、女性は無産階級を解放する事業、婦人解放事業に専念するべきで、恋愛や性欲は生活の中心問題ではない、と主張した<sup>18</sup>。

他にも、芦谷冷子が「恋愛揚棄」という論文で、プロレタリアートは恋愛至上主義に反対するのではなく揚棄（弁証法）の概念。否定しつつ高次の統一の段階で生かす事）しなければならないとし、「恋愛に仕事の邪魔をさせるな」と書いた<sup>19</sup>。

## 2.5. 性欲の肯定

恋愛過多を危惧する一方、恋愛における性欲を肯定的に捉える発言も多く見られた。『女人藝術』では堀江かど江が「恋愛 [は] 性欲本能に立脚している感情である。[...] 恋愛は性欲の純化され洗練された感情である」と述べている<sup>20</sup>。また、恋愛に関する二回の座談会「多方面恋愛座談会」と「異説恋愛座談会」では、神近市子<sup>21</sup>や伊福部敬子が恋愛は肉体的なものや精神的なものが両立して行くのが当たり前とし、更に伊福部は、精神面だけの恋愛を賞賛するのは「明治何年からかの女子教育から来た誤謬」であると主張した<sup>22</sup>。

『女人藝術』以外では、八木秋子が『自由連合新聞』に発表した記事で、コロンタイ著『恋愛の道』のゲニアが母の愛人を奪う心理には同感できないとしつつ、「性の行為は自由で何の道徳的基準に縛られる必要もなし」<sup>23</sup>と述べている。また高群逸枝は、プラトニックラブとコミニズムの恋愛観を否定し、恋愛とは「生殖行為の含むすべての肉体的精神的現象」<sup>24</sup>であるとされた。

## 2.6. アナーキズムの恋愛観

高群逸枝は、アナーキズムの視点から結婚廃止を訴え、母性や純粋な恋愛は統一的・集約的社会でのみ可能とし、マルクス主義の中央集権制は婦人を束縛するものであると述べている。

恋愛論が各誌で盛んになる前から、『文芸戦線』で「私は、結婚制度の廃止といふ思想が私有財産制度の廃止といふ思想に伴うて [...] みるものであることを確信するものである。」<sup>25</sup>と述べている。1929年には、『婦人公論』で、封建時代の恋愛観である「恋愛罪悪感」や、ブルジョア社会の恋愛観であり、エレン・ケイ<sup>26</sup>が代表する「恋愛の自由」に対し、アナーキストの恋愛観は「恋愛の自然」であり「結婚制度の廃止」である、と論じた<sup>27</sup>。

## 3. 同時代雑誌の出版状況における『女人藝術』の位置

『女人藝術』では1929年後半から、恋愛に関する記事がなくなる。それに対して、『婦人公論』では恋愛、結婚、性、に関する論文や特集が増え続けている。1930年創刊の高群逸枝の『婦人戦線』でも、恋愛、結婚、性に関する論考は多い。

「自伝的恋愛小説号」は販売部数を延ばすための「販売政策」であったが、それに対する疑問や批判が1929年6月の「女人藝術一年間批評会」に出ている。

新妻	販売政策として「自伝的恋愛小説号」とつけて、それからどの位売り上がったかそれだけの効果が上がったんですか？ [...]
素川	随分売れました。 [...]
八木	売れたけど、新聞や雑誌が非常に、新しい時代の画期的の一つの相を見たと云ふ意味で大変あちこちから...
素川	無論悪くも言はれたんですよ、悪く言はれながら或る意味で好意を持たれた。
生田	[...] 自伝的恋愛号に依つてワツと非難の声が高まった。 <sup>28</sup>

そして、『女人藝術』がエロティシズムにあまり走り過ぎる事に対する書き手の不満<sup>29</sup>、読者からの「プロレタリア的色彩を持つやうにして欲しい」<sup>30</sup>という要望などが語られた。『女人藝術』で発表された恋愛に関する論文はプロレタリアの立場から書かれたものばかりであるが、座談会や自伝的恋愛小説はそうとも限らない。このため、書き手と読み手の双方の意向に答える形で、恋愛問題は『女人藝術』では下火になっていったと考えられる。

雑誌を売るには恋愛・結婚・性の問題は格好のテーマであり、このため『婦人公論』などはその種の特集を続けて行く<sup>31</sup>。それに対して、「エロティシズム」よりは「かたいもの」<sup>32</sup>や「プロレタリア的色彩」を求める執筆陣と読者は、『婦人公論』路線をあえて選択しなかった。しかし、同人誌でなく一般誌（商業誌）であるために、売り上げも重視しなければならない点も指摘されている。

- 小池 文芸春秋では「火の鳥」<sup>33</sup>を褒めて「女人藝術」はエロチックで下品だつて貶すけれども、これは立場が違ふのではないでせうか。
- 望月 それは違ふ。[...] 同人誌と売る雑誌とは違ふ。
- 中本 少なくとも雑誌を出すからには、商売的な儲けると云ふことも、それは許されることだと思ふ。

雑誌出版において、雑誌の「イデオロギー」や方向性、そして「販売政策」の間のバランスを取る事の難しさが、『女人藝術』創刊一年目にして既に浮き彫りになっている。

また執筆陣は、『女人藝術』が他の女性文学者による雑誌や、女性読者向けの雑誌に対しての独自性だけでなく、総合誌との差異化を図ろうとしていた。

- 八木 私、神近さんの社会時評に求めることは、「改造」や「中央公論」に出るのからもう一步進んだ、もう少し女性の生活感情を織込んだ、もつとデリカなものが入つても宜いと思ふ<sup>34</sup>。

各雑誌が競合するなかで、『女人藝術』らしさを打ち出そうとする意気込みは感じられる。しかし最終的には「オール女性の為」、「銘々の立場を尊重して自分の立場を伸ばす」、「女人藝術」はどこまでも各派の寄合ひ」と女性の「公器」であることを確認して議論が終結してしまっているようにも思われる。

#### 4. 〈自伝的〉恋愛小説号への批判から—女が自分の体験を語るという事の意味

「自伝的恋愛小説号」についての批判は一樣に「自伝的」という題を付けたという点、「自伝的」という言葉の意味の曖昧さに集中している。

- 平林 『自伝的恋愛...』あれがイヤでした [...] 自伝的恋愛の小説をかこうとして、人間が小説を書けるものぢやない、小説と云ふものを芸術とすれば... [...] ゴシツブ的な面白味を書く為、小説と云ふものは書けないと思ふ。
- 八木 「自伝的恋愛小説号」でも必ず自分の体験をお書きになつたものでない、大分創作の人もありませう。
- 今井 自伝的となると...小説の中には虚実があるでせう、その虚の方まで実にされさうで、私が書いた点から云へば、非常に書

きにくくなると云ふことはあります。

- 八木 自伝的恋愛号のプランを立てたのは長谷川さんで、長谷川さんのお気持ちとしては、今までの恋愛小説は実に皮を被つた、美化された、自分を或る点まで偽つたものであつたから、真実の時代の女性が、一切をブチマケた、正直な、血の出るやうな相を見せて貰ひたいと云ふやうなお気持ちから [...] やつたんです。
- 上田 それは自伝的と云ふやうな題をつけなくても宜いですわね。
- 素川 つけた所が販売政策であつて、内容そのものをさうするやうにしたのではない...

単なる自伝ではなく「自伝的」であるため、厳格な意味での自伝<sup>35</sup>とは一線を画しており、真実を語るという「契約」を著者が読者にしているわけではない。であるから八木の言うように「創作」で書いている作者がいる可能性もある。

また、当時の小説というジャンルには、今井が述べている様に、フィクションつまり虚構だけではなく、私小説や心境小説などのように、作者の実生活が作品内に表れることもある。であるから、虚構かもしれないし真実かもしれないという曖昧さを残すには、わざわざ「自伝的」としないで「恋愛小説号」とするだけで良かったかもしれない。

小平麻衣子は、1913（大正2）年9月『反響』に発表された生田花世の「食べることと貞操と」について次の様に述べている。

「男性文学者にとっても中心的話題であつたはずのこの〔告白〕という〕ポルノグラフィが、男性において既に文学の中心的ジャンルとなつていた小説とみなされていたのとは対照的に、女性においては決して小説とはみなされない、つまり文学の周辺としての（小説以外）として要請されていた」<sup>36</sup>。

つまり「告白」は、男性作家の場合「小説」というジャンルでも可能であつたが、1913（大正2）年の女性の場合は小説以外である必要があつた。それから16年後の1929年も同じ状況であつたなら<sup>37</sup>、女性作家の告白であると明確にする為には、「恋愛小説号」の「自伝的」という冠は必要であろう。

しかし上田は「真実の時代の女性が、一切をブチマケた、正直な、血の出るやうな相を見せ」るため、つまり真実を正直に語るためであれば、別に「自伝的」という題をつけなくても良かったと言い、続いて素川はその題をつけたのは「販売政策」であり雑

誌を売る為であったと強調している。

別に「自伝的」という題をつけなくても良かったというのが上田の強がりではなく事実であったと解釈すれば、女性文学は既に周縁から中心へと進出しており、読者の「ポルノグラフィックな視点」や「窃視的な欲望」<sup>38</sup>を販売戦略として利用し、「自伝的」という題を意識的につけるまで女性文学が成長したと言えるだろう。

反対に、「自伝的」という題は必要ないというのが上田の虚勢であれば、周辺領域にいる女性が雑誌を売るためには、自己のプライバシーを暴露するという自分の身を売るような行為も、必要であるということである。こちらの解釈の方が、当時の現実に近いのかもしれない。だとすれば29人の作者は、このような事実を把握しながらも自ら「ポルノグラフィック」としての〈自伝的〉恋愛小説を意識的に書いているのか、それとも、窃視的眼差しに暴露される様に書かされてしまっているのか。この視点から各作品を読み込む事も可能かもしれない。

## まとめ

最後に、本研究の今後の課題をまとめて本論の結びとしたい。「自伝的恋愛小説号」からは、女性作家の告白の形式の問題、また恋愛小説というジャンルの問題が浮かび上がり、これは更なる分析に値すると思われる。しかし、当時の恋愛論についての考察をすすめるにあたって、恋愛に関する論文記事と、創作としての恋愛小説とは、個別の検討が必要であろう。

当時の恋愛論の更なる全体像をつかむため、また『女人藝術』と他雑誌の類似点や相違点を綿密に分析するためには、「資料1」に列挙した論文以外のものも考慮に入れる必要があると思われる。まず、『女人藝術』と他の女性誌との比較検討をするには、当時『婦人公論』や『婦人戦線』に発表された恋愛論を、今回取り上げた山川菊栄や高群逸枝の論文以外の記事も網羅するのが最善であろう。また、『女人藝術』は創刊当時「一方に『青鞥』を踏まえながらも一方、女性の『文藝春秋』を目指していた」<sup>39</sup>とも言われているため、『文藝春秋』との比較も有用である。更に、『女人藝術』が左傾化することを踏まえ、当時の総合雑誌のうち社会主義的な『改造』や中道的な『中央公論』や『新潮』との比較も進めたい。

## 注

1. 『『女人藝術』創刊のつどひ』、『女人藝術』1928年8月
2. 菅野聡美『消費される恋愛論—大正知識人と性』青弓社、2001年、196頁

3. この恋愛論争に前後して、山川と高群の間には婦人運動をめぐる論争もあるが、菅野はそれには触れていない。鹿野政直・堀場清子『高群逸枝』朝日新聞社、1977年参照。
4. 「多方面恋愛座談会」、『女人藝術』1928(S3)年9月
5. 山川菊栄「景品付き特価品としての女」、『婦人公論』1928(S3)年1月
6. らいてう「知識婦人についての考察」、『女人藝術』1928(S3)年8月
7. 高群逸枝「山川菊栄氏の恋愛観を難ず」、『婦人公論』1928(S3)年5月
8. 山川菊栄「ドグマから出た幽霊」、『婦人公論』1928(S3)年6月
9. 高群逸枝「踏まれた犬が吠える」、『婦人公論』1928(S3)年7月  
この後、1928(S3)年9月に平林たい子「ロマンチズムとリアリズム—山川菊栄高群逸枝両氏の論争の批評—」を『婦人公論』に発表し、山川高群論争をまとめた。山川の論旨を支持し、高群を批判したが、これに対し、高群は『問題』1929年7月号「婦人の旗(1)」で「平林某とかいふ小娘が[...]封建主義恋愛観などと、わたくしに云つてあるらしいのですが、この娘は封建主義的恋愛観がどういふものであるか分かつてみないのだから滑稽です。要するに彼女たちの反動的思想はその無知と一致します。」と記した。
10. 林房雄「新『恋愛の道』コロタイ夫人の恋愛観」、『中央公論』1928(S3)年7月
11. 高群逸枝「新刊良書推奨(コロタイ著林房雄訳『恋愛の道』)」、『東京朝日新聞』1928(S3)年5月18日
12. 高群逸枝「官僚的恋愛観を排す—コロタイ夫人の恋愛観について」、『中央公論』1928(S3)年8月
13. 無名指子『『恋愛の道』各人各語側聞記』、『女人藝術』1928(S3)年7月
14. 山川菊栄「婦人界見たまま—コロタイの恋愛論」、『改造』1928(S3)年9月
15. 平林たい子「最も新しい恋愛」、『文芸戦線』1927(S2)年9月
16. 神近市子「新しき恋愛の理論について—コロタイの『赤い恋』をよむ」、『女性』、1928(S3)年3月  
『婦人運動』の無署名の記事「恋愛の清算」(1928(S3)年8月)も、「過剰な恋愛や、病的な性愛を清算しなければ駄目だ。」としている。
17. ゼシカ・スミス(神近市子)「革命と恋愛」、『女人藝術』1928(S3)年8月
18. 菊池小夜子「レーニンの恋愛観」、『女人藝術』1928(S3)年12月
19. 芦谷冷子「恋愛揚棄」、『女人藝術』1929(S4)年6月。  
揚棄とは弁証法概念で、否定しつつ高次の統一の段階で生かす事。  
この他に「異説恋愛座談会」では、八木秋子が、過去に恋愛を「美しいもの」と思い過ぎたが、仕事にもっと熱中するべきであった、今は「恋愛を軽蔑したい」と述べている。  
「異説恋愛座談会」、『女人藝術』1928(S3)年10月
20. 堀江かど江「如何に恋愛すべきか」、『女人藝術』1928(S3)年9月

21. 「多方面恋愛座談会」、『女人藝術』1928 (S3)年 9 月
22. 「異説恋愛座談会」、『女人藝術』1928 (S3)年 10 月
23. 八木秋子 (佐上明子)「恋愛と自由社会」、『自由連合新聞』1928 (S3)年 11 月 1 日
24. 高群逸枝「恋愛と強権」『異色戦線』1929 (S4)年 5 月。論旨をまとめると以下の通りである。  
プラトニックラブにおいて、性欲は恋愛ではない。しかしプラトンは生殖は国家のために必要であると『レパブリカ』で述べている。プラトニックラブ観では国家のために生殖しなければならぬので、「人民どもの機械化を必要とする。」コミュニズムではコロンタイの様に恋愛を私事とする人もあれば、反対に性は階級に従属するため、好き勝手に男女が結合してはならない、とするものがある。二者とも強権の恋愛観である。しかし、「好き勝手に結合することが、即ち本当な意味において、生殖の自然」である。「性は国家にも強権にも従属」しない。恋愛とは「生殖行為の含むすべての肉体的精神的現象」である。しかし「政治的経済的の制度が自然な恋愛を妨げている。」
25. 高群逸枝「無産階級の恋愛思想」、『文芸戦線』1926 (T15)年 9 月
26. エレン・ケイの『恋愛と結婚』は平塚らいてうや、厨川白村ら大正時代の男性知識人に影響を与えた。恋愛結婚の主張であると同時に、種族向上の為に恋愛と結婚を規制せよという主張をした。菅野、前掲書、195 頁
27. 高群逸枝「いかに恋愛すべきか」『婦人公論』1929 (S4)年 1 月。高群逸枝のアナーキズムと恋愛論を扱った近年の研究書に丹野さきら『高群逸枝の夢』藤原書店、2009 年、がある。
28. 「女人藝術一年間批評会」、『女人藝術』1929 年 6 月、2 巻 6 号、5-7 頁
29. 同上、10 頁
30. 同上、12 頁
31. 現在もその路線は変わっていないようである。雑誌のホームページ下には「雑誌『婦人公論』は、美しく年を重ねている女性たちのために、豊かで艶めく生き方を提案します。結婚、離婚、仕事、出産、子育て、人づきあい、セックスといった小誌ならではの特集企画を中心に、旬の芸能人や著名人のことば、話題の作家の小説、ファッション・美容・カルチャーなどの最新情報などを多彩に盛りこんで、輝く女性たちの「知りたい」に応えます。」とある。(下線は著者による。) <http://www.fujinkoron.jp/>
32. 『女人藝術』1929 年 6 月、2 巻 6 号、10 頁
33. 1928 (昭和 3) 年 10 月から 1933 (昭和 8) 年 10 月まで発行された文芸雑誌。創刊号は竹島きみ子、窪川いね子・五島美代子・林政江・小金井素子らが寄稿している。小説、短歌、詩、エッセイ、翻訳文学が中心。
34. 『女人藝術』1929 年 6 月、2 巻 6 号、11 頁
35. Philippe Lejeune, *Pacte autobiographique*, Seuil, 1975 (フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』水声社、1993 年)
36. 小平麻衣子『女が女を演じる—文学・欲望・消費』新曜社、2008 年、175-176 頁
37. ちなみに 1928 年に『女人藝術』発表された生田花世の告白的作品は、創作や小説でなく「感想」とされている。
38. 飯田祐子「語りにくさ」と読まれること—杉本正生の「小説」(『青鞥という場』森話社、2002 年) 76 頁、91 頁
39. 尾形明子『女人芸術の世界』ドメス出版、1980(1993)年、33 頁

資料 1 1928 年前後の恋愛関連記事リスト

年	月	雑誌・本	著者	記事題名	雑誌特集	注記
1926 (T15)		『恋愛創生』	高群逸枝			万生閣
	9	文芸戦線	高群逸枝	無産階級の恋愛思想		
1927 (S2)	4	婦人公論			非恋愛結婚	
	6	婦人公論	高群逸枝	徳田秋声氏の恋愛の態度を批評す		
	9	文芸戦線	平林たい子	最も新しい恋愛		
1928 (S3)	1	婦人公論	山川菊栄	景品付き特価品としての女		*
	1	婦人公論			恋愛売買時代	
	1	文芸戦線	平林たい子	*コロンタイ女史の『赤い恋』について		表紙三に『赤い恋』広告
	3	女性	神近市子	*新しき恋愛の理論について—コロンタイの『赤い恋』をよむ		*
	5 月 18 日	東京朝日新聞	高群逸枝	*新刊良書推奨 (コロンタイ『恋愛の道』について)		*
	5	婦人公論	高群逸枝	山川菊栄氏の恋愛観を難す		*
	6	婦人公論	山川菊栄	ドグマから出た幽霊		*
	6	婦人公論			恋愛行進曲	
	7	中央公論	林房雄	*新『恋愛の道』コロンタイ夫人の恋愛観		*
	7	女人芸術	無名指子	*『恋愛の道』各人各語側聞記		
	7	婦人運動	並木琴子	*読後の感想『恋愛の道』		『赤い恋』『恋愛の道』広告有
	7	婦人公論	高群逸枝	踏まれた犬が吠える		*

パリ共同ゼミ

	8	中央公論	高群逸枝	*官僚的恋愛観を排す—コロンタイ夫人の恋愛観について		*
	8	女人芸術	らいてう	知識婦人についての考察		
	8	女人芸術	ゼシカ・スミス (神近市子)	*革命と恋愛		
	8	婦人運動	(無署名)	*恋愛の清算		
	9	改造	山川菊栄	*婦人界見たまま—コロンタイの恋愛論		*
	9	女人芸術	生田、神近、他 12 名	多方面恋愛座談会		
	9	女人芸術	堀江かど江	如何に恋愛すべきか		
	9	婦人公論	平林たい子	ロマンチズムとリアリズム—山川菊栄高群逸枝両氏の論争の批評—		*
	9	婦人公論			異性間の友情	
	10	女人芸術	伊福部敬子	母と子の記録より		
	10	女人芸術	新妻伊都子	父兄第一思想の跳梁と其破産への道		
	10	女人芸術	伊福部、長谷川、他 6 名	異説恋愛座談会		
	10	婦人公論			恋愛時代相	
	11 月 1 日	自由連合新聞	八木秋子 (佐上明子)	*恋愛と自由社会		*
	11	女人芸術	堀江かど江	そこばくの言		
	11	婦人公論			結婚多難	
	12	女人芸術	菊池小夜子	レーニンの恋愛観		
1929 (S4)	1	女人芸術	高群逸枝	恋愛行進曲 (長詩)		
	1	婦人公論	山川菊栄	*今日の恋愛をどう見る？		*
	1	婦人公論	高群逸枝	いかに恋愛すべきか		*
	1	婦人公論			新恋愛風景	
	2	女人芸術	らいてう	或る日の対話		
	3	女人芸術	29 名		自伝的恋愛小説号	
	4	異色戦線	八木秋子 (佐上明子)	高群逸枝さんへ		*未見
	4	婦人公論			結婚の憂鬱	
	5	異色戦線	高群逸枝	恋愛と強権		*
	5	婦人公論			恋愛の甦生	
	6	女人芸術	芦谷冷子	恋愛揚棄		
	8	婦人公論			結婚忌避時代	
	10	婦人公論			恋愛殉死	
	11	婦人公論			結婚浄化	
1930 (S5)	2	婦人公論			明日の良人	
	4	婦人戦線			家庭否定	
	7	婦人戦線			性の処理	
	8	婦人公論			女心迷心	
	9	婦人公論			男女婚期の悩み	
	9	婦人戦線			無政府恋愛	
	10	婦人公論			貞操浄化連盟	
	11	婦人公論			モダン恋愛戦線	
1931 (S6)	2	婦人戦線			性の経済	

「記事題名」の欄では、コロンタイの小説（『赤い恋』と『恋愛の道』）やコロンタイの恋愛観を主に取り上げている論文の題名の前に\*印をつけた。

「注記」の欄では、菅野聡美が『消費される恋愛論—大正知識人と性』（青弓社、2001 年）で恋愛論として例示したものを\*印で示した。

おおた ともみ/ストラスブール大学 CRCAO (UMR 8155)